3 親学の目指すもの

3-1 子どもの心の育成

親学の目的は、**「親の成長を通して子どもの心を育てること」**です。子どもは日本の、世界の、地球の未来の担い手です。その子どもたちの心を育てるということは、これからの日本の、世界の、地球の未来の幸福を約束することだといってもよいでしょう。

では、親学では、どういう心をもった子どもたちを育てていけばよいのでしょうか。まずは、「ものごとを広くとらえることのできる心」「行為の結果を想像できる心」です。さらには、「誰とでも話しあい、かかわりあうことのできる心」「出会った一人ひとりの人に誠実な心で向きあえる心」もはぐくむ必要があります。

こうした心を育てることは、言葉をかえていえば、**「他者とともに生きる力」を育成していくこと**にほかなりません。人間は、人と人とがかかわりあう社会の中で生活をしています。他者とのかかわりを拒絶して、自分一人で生きていくことは決してできないのです。子どもたちが独立したあとも、幸せに生きていくためには、共感性、社会性、抑制力、問題解決能力、コミュニケーション能力といった、周りの人たちと折りあいをつけながら、仲良く生きていく能力がきわめて大切です。

しかしながら、これまでの子育ては、心よりも体に重きが置かれてきました。親は、栄養など子どもの体の健全な成長にばかり力を注ぎ、しつけなど心の面は保育所や幼稚園、学校などに依存してきたのです。

子どもの心を育てるには、特に0歳から3歳までの家庭教育が一番大事であるにもかかわらず、それがなおざりにされてきた結果、子どもたちは体の成長に比べて心の成長が大きく遅れてしまったのです。「心と体のバランスのとれた教育をいかにすすめていくか」も、親学の重要なテーマです。